

ning Space

共同学習空間

「ラーニングコモンズ」の今。

2012（平成24）年、中央教育審議会は「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学習の継続、主体的に考える力を育成する大学へ～」を答申した。同答申においていわゆる「学修の質的転換」の重要性が示されたことを受け、文部科学省においてはその一助として、「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」による補助金が交付されることとなった。特に、「主体的な学びへの転換を図り、学生の学修効果を最大限発揮するための効果的な教育を行うための環境を整備する取組（2012年度・A区分）」が設定されたこともひとつのきっかけとなり、これまで多くの大学に多様なラーニングコモンズが整備されてきた。また、アクティブラーニング

CONTENTS

『アカデミックコモンズ』は新たなステージへ

鎌田 真

関西学院大学神戸三田キャンパス事務室
キャンパス運営課課長

授業外で学びを支えるSPACE

関田 一彦

創価大学副学長・学士課程教育機構長



Collaborative Lear

やPBL (Project Based Learning) の実践を実現する空間・環境整備と共に、学生たちがより効果的に学べるよう、人員の配置も含めた多様な支援体制も構築された。ラーニングコモンズが全国の大学に本格的に整備され始めてから10年が経過する中で、社会全体がコロナ禍という未曾有の状況を経験したことに伴い、オンライン化が急激に進展した。大学においても、その経験は新たな教育展開や学修の形を生み出したが、共同学習拠点としてのラーニングコモンズにどのような変化をもたらしたのだろうか。

本企画では、大学での学びの姿が大きく変化する先駆けとして設置されたラーニングコモンズについて、その黎明期からコロナ禍を経て今に至る時間軸において、共同学習拠点としての役割の変化・変遷、その場を活用する学生の利用状況・利用方法や、学生たちを支える体制・提供サービス等の変化を検証すると共に、そのことを通じて学生の学びの姿の変化と現在を知り、共同学習拠点の今後の展望を考える機会としたい。

利用形態の変化に対応

池上真人

松山大学副学長

コロナ禍・キャンパス移転を経た「コラトリエ」の進化

嶋田みのり

東北学院大学ラーニング・コモンズ特任助教

キャンパス全体で構成するラーニングコモンズ

― 追手門学院大学の教育改革がもたらした

ラーニングコモンズの新しい形―

伊藤 文男

追手門学院大学共通教育機構教授・

教務部長・学習支援センター長・

WIL推進センターコーディネーター

学生が集まる空間を魅力的に

― 明治大学におけるラーニングコモンズ―

菅 和禎

明治大学管財部施設課課長補佐

『アカデミックコモンズ』は 新たなステージへ

鎌田真

関西学院大学神戸三田キャンパス事務室
キャンパス運営課課長

1 概要

アカデミックコモンズは2013年4月、約6千人が学ぶ神戸三田キャンパスに開設した共同学習空間である。キャンパスの中心に位置する場所に建設し、2階建て約4000㎡で、多種多様な空間に500席以上の座席を設けた「学び・憩い・学生活動の融合」をコンセプトとする『生きた学びの場』として11年間運用をしてきた。平日9時から22時まで開館しており図書館と並びキャンパス内で一番長く利用できる。館内では授業は実施しておらず、学生たちは授業の空き時間や放課後の学習などに

自由に使うことができる。

また、2021年4月館内に企業を招いてのワークショップ「BizCLASS」や企業との接点を持つ「Meet UP」を開催するなどビジネスマインド醸成をコンセプトとする新たなカフェ『BIZCAFE』がオープンした。同カフェを中心に産学連携によるSDGs推進プロジェクトとして、スノーピーク（2020年包括連携協定締結）との共同開発による大学オリジナルのマイボトルを購入・持参すると在学期間中無料で飲料が提供され、学内でのペットボトル排出量を削減するという、SDGsに関する学びの実践にも取り組んでいる。2018年度キャンパス全体で27万本排出されていたペットボトルのうち10万本削減を目標としてきた。これまでに累積4770本のオリジナルボトルが購入され、2023年度はペットボトル約11万本を削減、目標を達成した。

2 共同学習拠点としての学生の利用状況の変化

(1) 開設当初

アカデミックコモンズ開設以前は、学生たちは授業外

の学習場所として図書館や食堂、空き教室を利用しており、グループでの学習となると予約して利用できる場所が限られるなどの課題があった。

同施設の開設後は、学生たちは予約不要で授業の空き時間に友達と利用できる新たな学習空間として多くの利用者で賑わった。しかし、当初複数の可動机を組み合わせて6～10人のグループ学習を想定して設置した座席は、全部が埋まることはなかった。利用調査をしたところ利用者のほとんどが3・4人のグループで、異なるグループが一緒に座ることがないことが分かった。その後、座席の初期配置を4人グループ中心に変更し、日中は自由に移動してもよいが翌朝には初期配置に戻すこととした。これにより、座席の満席率は高まった。原因は定かではないが、学生自身が積極的に机を動かし、自分たちの利用スタイルに合わせた配置を創り出すことになっていった。

また、図書館と共同学習空間の利用において、一人での勉強は図書館、グループでの勉強はアカデミックcommonsと学習方法により利用空間を使い分ける顕著な利用実態の変化が見られた。

アカデミックcommonsでは、開設当初から毎年、新入

生オリエンテーションで、空間の使い方や先輩たちの活動状況を紹介する場を設けてきた。先輩たちの利用方法を見て後輩たちも受け継ぐ風土が自然とでき、学習空間としての利用が定着している「写真1」。



[写真1] 可動机を配置するオープンな学習エリア

(2) コロナ禍前

キャンパス内で一番長く利用できる施設ということも

あり、開設後、時間の経過とともに利用者は増え、授業終了後、22時の閉館前まで利用する学生が多く見られた。

課題を教えあいながら取り組んだり、ゼミの課題の打ち合わせや後述するプロジェクト活動を行ったりするなど、様々な自主活動の場となっていた。

理系の学生たちが、オープンエリアに設置した可動式のホワイトボードや個室にある壁一面のホワイトボードに数式をぎっしり書き勉強する光景はアカデミックコモンズの風物詩ともなっており、今でも変わらず見られる姿の一つである。

2019年には学生の発案で新たな学び場として、スノーピークのテント（ラウンジシエル）を設置し、以来常設している。屋内にいながらテントという半閉塞的な空間で靴を脱いで集まれる場として、グループで利用できる人気のエリアになっている。

また、コロナ禍前の利用の特徴として、約40台の貸出PCの利用頻度が高く、日中は返却待ちの学生がよく見られた。

(3) コロナ禍後

2020年の新型コロナウイルス蔓延により、春学期は

キャンパス閉鎖による閉館、秋学期以降も固定座席、「密接」を避けるため座席数を削減したことにより、従来の利用とは異なる状況が長く続いた。2023年5月に新型コロナウイルス感染症の5類移行を受け、ようやくコロナ禍前の雰囲気を取り戻しつつある。

しかし、学生の利用方法は大きく変わっていた。特徴的なのは、自分のPCを学校に持参するようになったことだ。館内での貸出PCの利用は大幅に減少する一方、PCを充電するために貸出している延長コードの利用頻度が高くなっている。また、学習スタイルや学生の活動に「オンライン」が定着したことも挙げられる。PCで作業をしているように見えても、オンラインミーティングをしているなど、対面で一緒に時間を共有する以外の方法が生まれている。

さらに、就職活動でも各種説明会や面接がオンラインで実施される場面が増え、アカデミックコモンズ内でも「静かにオンライン作業等ができる場所」のニーズが高まってきている。この点、館内にあるキャリアセンター内に面談用の個室ブースを導入し、対応している。

(4) チューター制度

開館当初から神戸三田キャンパスの学部出身の大学院生によるチューター制度を導入している。平日2限目から5限目まで授業時間に合わせてチューターが館内の一角に待機し、学生の学習相談にのっている。予約もできるが、空いていれば飛び込みで気軽に相談できる体制としている。レポートライティングに加え、各チューターの専門・専攻分野により、例えば理系の実験レポートや数学、物理、力学、統計学など、幅広い学習相談に応じている。コロナ禍では一時オンラインや対面とのハイブリッドで相談を受けていたが、現在では対面を原則としている。

年により相談件数の増減はあるが、学生からの相談ニーズは開設当初からほとんど変わっておらず、チューター制度が定着している。

3 一 学生生活活動拠点としての共同学習空間の利用

アカデミックコモンズでは、学生たちが自ら定めた目標や目的を達成するための自主的な活動も「学び」と捉えアクティビティ（イベント）やプロジェクト活動とし

て開設当初から展開していることが大きな特徴である。

講演会、ワークショップ、展示会、地域の子供を招いた企画など様々な形式で、共同学習空間の一角で展開されるこれらのプログラムは、あえて学習を含め、他の活動をしている学生たちの目に触れることで知的好奇心を掻き立てることを企図している。

(1) アカデミックコモンズ・プロジェクトの活動

グループで目標を掲げ、達成を目指しチャレンジする4つのタイプからなるアカデミックコモンズ・プロジェクト。特に、1年を通して、グループで達成を目指す明確なゴールを設定し挑戦する「リード・タイプ」と「SDGs・タイプ（2019年から設定）」（SDGsのゴールと関連が深い明確な達成目標を設定するもの）は、応募・採択されると、プロジェクトごとに館内の設備を一定期間占有でき、プロジェクト推進に有用なセミナーの提供、コーディネーター（プロジェクト活動に関する専門家）の支援を受けられる。ただし、正課外の活動のため単位等は付与されず、プロジェクトに採択されても必ず支給されるような金銭的な支援はない。

開設以来2024年度までの12年間で、167のプロ

プロジェクトを採択してきた。プロジェクトは、1年単位で、発展的な目標にチャレンジする場合「継続」が可能で、これまでの大きな傾向として、毎年「新規」と「継続」が約半分ずつの割合となっている。また、高校時代にSDGsに関する学習や探求活動に取り組んだ経験を活かしSDGsを意識したプロジェクト活動も活発である。

(2) アカデミックコモンズ・プロジェクト進展について

3つの観点からプロジェクトの進展について紹介する。

① 目標設定の高度化

開設初期のころは、「ものづくり」「映像制作」「仲間づくり」など、自分たちの「趣味」「興味」を基礎としたプロジェクトが多かった。最近では、社会課題や地域課題、環境問題、SDGsへの貢献など、大きな課題に対して、自分たちの身近な環境で具体的な行動として何ができるかという観点で目標を掲げるプロジェクトが増えている。例えば、「夢を持ち将来のビジョン形成に役立つ情報を提供する」「小中学生がSDGsに関する問題に対し当事者意識を持てるよう周知活動を行う」「地域住民と協力してまちの魅力を発信し、まちの活性化を目指す」など、ユニークなものがある。

② 継続による発展性

12年目を迎える今日まで継続し、目標設定の発展をさせながら、取り組みの質の向上も実現しているプロジェクトが2つある。その1つは「『ソウゾウ』を超える『ワクワク』を」をテーマにプロジェクトマップ핑制作を通じて見てもらう人に感動を届ける」ものである。

開設当時、建物に映像を投影するプロジェクトマップ핑が盛んで、数人の学生が自分たちにでもできると確信し、自分のPCと館内での貸出用プロジェクトターを用いキャンパス内でのイベント開催を目指し立ち上がったのがきっかけだ。その後、仲間と独学で教えあい、チャレンジを重ね、時には教員にアドバイスを乞い、技術は年々高度化、制作映像の質も向上し続けている。次第に、学外イベントでの出演など、提供価値を承認してもらえることへの達成感を実感しながら、毎年メンバーは入れ替わりながら発展を続けている。

③ アクティビティによる周囲への波及

プロジェクト活動の一環で、活動そのものを学生に認知・体験してもらうため、アカデミックコモンズ内でアクティビティ(イベント)を開催することがある。しか

し、当初からの課題として、企画に時間を要し、事前情
宣が手薄になり、当日参加者が少なく、学生たちのモチ
ベーションや達成感を低下させてしまうことがあった。最
近ではSNSを活用し、普段から情報発信を重ね、フォ
ロワーをうまくアクティビティに引き込むことに成功し、
課題解決をする事例が生まれている「写真2」。



[写真2] 共同学習空間で展開されるアクティビティ

おわりに

アカデミックコモンズは開設から12年目を迎え、今の
学生にとって施設の存在は当たり前前のもものになっている。
建物のコンセプトは変わっていないものの、前述のよう
にコロナ禍を経て、学生の空間利用状況は変わってきて
いる。また、アカデミックコモンズ運営に関わる担当職
員の体制も変わっていく。その時々状況に応じて、学
生の動向やニーズに合わせた、可能な範囲での設備の充
実や制度の変更・拡充が大切だと考える。

アカデミックコモンズ・プロジェクトにおいても、学
生たちの目標に向けてチャレンジしたい気持ちを、目標
達成という成功体験に結びつけられるよう、チャレンジ
のステップ化を図れる制度変更を取り入れるなど、私自
身もチャレンジを続けている。そして、アカデミックコ
モンズが、学習の場、自主的な学生生活動の場として、「深
みのある学び」を実現できる知的創造空間の場として学
生に提供できるよう、これからも取り組んでいきたい。

授業外で学びを支える SPACe

関田 一彦

創価大学 副学長・学士課程教育機構長

はじめに

創価大学最大のcommons SPACe^{*1} (Student Performance Acceleration Center) は2013年9月、中央教育棟竣工に合わせ、その西棟2階に開設された。総面積1700㎡超のSPACe内は複数のエリアに分かれ、2つのセンターがある。管轄は総合学習支援オフィスが行っている「図1」。

入口のゲートを抜けるとすぐに図書コーナーが広がる。参考書や課題図書、語学教材などが背の低い書架にコンパクトに並んでいる。レポートや卒論の参考文献検索を支援するレファレンスデスクも併設されている。その右手にインフォメーションカウンターがある。入口左手



〔図1〕SPACe略図

奥にはPC自習室（PC46台設置）があり、そこに続く左手通路に沿ってレポートチュータリングや個別学習指導を行う個室やグループ学習室が並んでいる。図書コーナーの向こうには自習スペースが広がる。この自習スペースと相對する形でヘルプデスクと呼ばれるよろず相談コーナーがある。ここまですを総合学習支援センターが

運営している。さらにヘルプデスクの前を直進した奥にはWLC（ワールド・ランゲージ・センター）が運営するSAC（セルフ・アクセス・センター）がある。

1—SPACE開設以前

本学には commons 的な機能を持つ施設は複数あるが、そのいくつかは中央教育棟着工時点ですでに存在していた。たとえば2000年代からラウンジという名称で経済学部生向けに自習スペース（可動式の椅子・テーブルとPC/プリンターを備えた空き教室）が提供されていた。ラウンジには経済学部の上級生がSAのような役割を果たし、必修科目で苦勞している後輩の相談に乗ったり、向学心に燃える仲間と共に経済学検定試験大学対抗戦に挑戦していた（第8回から第18回まで11連覇の記録がある）。

また、図書館の1階にもグループ学習やセミナーが可能なオープンスペースがSPACE開設に先駆けて整備されていた。図書館のcommonsにはCETL^{※2}（総合学習支援センターの前身）から学習相談員としてTAが

派遣され、レポートの書き方や文献調査のアドバイスを行っていた。

さらには、WLCの分室として本部棟7階にGlobal Villageと呼ばれる留学生と日本人学生の交流の場があった。そこでは外国語で会話する複数の語学学習プログラムも実施されていたが、それ以外の時間帯は留学生同士の交流の場ともなっていた。ゆったりしたソファに座り、勉強のこと、日本の生活のことなどさまざまな情報交換は留学生の学習意欲向上に資する時間になったことは想像に難くない。こうした先駆的な取り組みを背景に、それらの機能を集約する形でSPACEは生まれた。SPACEの面積の1/3を占めるWLCのSACにはGlobal Villageから洒落たソファセットが複数持ち込まれ、そうした機能は継承されている。

2—コロナ禍後の取り組み

SPACEの自習スペースには小ささまざまな形のテーブルと合わせて286席の椅子がある。今でこそ当たり前になってきているがファミレスを想起させるテーブル

ルや畳の個室など、学生たちがニーズと気分で選べる学習環境を提供しようとしてきた。コロナ禍前には学期中毎日、延べ2000人を超える入場者がいた（開設5年半で200万人の入場者数を記録している）。中規模大学でこれだけの利用者数がある背景として、以前からあるコモンズ的な場へのニーズに加え、初年次セミナーなどでSPACEの利用案内を行い、WLCが正課課題としてSPACEの利用を課し、直接・間接に利用を促していることがある。また、本学の授業におけるアクティブラーニング実施率は8割を超え、学生同士が集って学ぶことに慣れ親しんでいることも大きな要因と思われる。

コロナ禍で利用者は激減したが、行動制限が解除になって以降、徐々に利用者が戻り2023年度秋学期では1日延べ1500人近くに回復している（コロナ禍中は、自宅でもSPACEにいるような気持ちで学習に励んでほしいという職員の発案から、SPACEの様子をネット配信していた）。コロナ禍前後でサービスの本質に大きな変化はないが、いくつか具体的な取り組みとしてSAC、ヘルプデスク、そしてオアシスプログラムについて紹介する。

(1) SACの取り組み

OL（オープンラウンジ）は、SAC内に設けられた自律語学学習スペースである。コロナ禍の影響が残る2022年度は限定的に設置していたが、2023年度春学期からは常時開放している。OLで学生は、一人または複数でそれぞれのニーズに合わせ英語などの外国語学習に取り組む。外国語学習をサポートするためのリソースも多数提供している。また、OL内に英語学習相談コーナーのデスクを設置し、学生の語学学習に関する相談に対応できるようにしている。

OLは、真の自律性を育むことを目的とする。そのためOLは個々の学生に適した学習体験を提供することを重視する。SACの他のプログラムでは、何を行うかあらかじめ決められているが、OLで行われる学習は学生次第である。さらに、OLでの活動は課題のためではなく、学生の自律的な学習とその経験を楽しむために行われる。実際、OLは週に200人近い学生が利用している。これは、SAC利用を促すために学生に課題などで利用を義務付ける必要はないことを示している。また、日本人学生と留学生がOLで出会い、互いの言語を理解し、楽

しくやり取りしたり助け合ったりする事例が数多く見られている。

従来、WLCのSACは語学教育の正課に対応した、あるいは準正課のプログラム提供を主目的としてきた。

それが学生の多様化に伴って、学習者の主体性を引き出す場づくりに注力し始めたことで、SPACeの奥座敷が前庭である自習スペースと機能的に繋がってきたと考えている。

(2) ヘルプデスクの試み

ヘルプデスクは学生が学生の学業に関する相談に乗るサービス（ピアサポート）である。学期はじめは履修相談など、1年生からの相談が多い。ヘルプデスクの学生スタッフは適宜、自主的に学習セミナーを企画・運営する。タイムマネジメント、超初心者向けICT活用、留学、試験対策、簿記など学生スタッフが自分たちの強みと利用者のニーズを勘案しながらテーマを決めて開催している。なお、スタッフはSAと同じ待遇で雇用されている。

コロナ禍後に顕著になったのは、オンライン授業では出席や課題提出ができたのに対面授業ではそれが難しい

学生の増加である。オンラインであれば、寝起きどころか寝床の中でも受講できる。グループで取り組む課題など、オンライン授業では個別に取り組んでもできるような課題が多く、必ずしも対人関係能力が高くななくても対応できた。それが対面となると、グループ活動が苦になり、協力して成果を出すことが難しい。

こうした学習環境の変化に受講リズムを崩す学生への対応として「ピアサポ」と呼ぶ伴走サービスは有効である。ピアサポはコロナ禍前から存在していた。単発の学習相談以上、オアシスプログラム（後述）未満の学生ニーズへの対応として、学生スタッフの提案で始まった。当初からタイムマネジメントを重視し、学生一人に担当の学生スタッフが一人付き、週1回程度のチュータリングを通して「学生にとって最適な学習方法や時間の使い方と一緒に考えていく」サービスを基本としている。今では、もし特定の授業や基礎学力（数学関連）のサポートが継続的に必要な場合には、担当可能なスタッフとのマッチングまで行っている。

このサービスは学期はじめに利用者を募り、応募者と面談の上、学期を通じて定期的に状況確認や学習相談を

行うものである。もちろん、対人援助の専門家ではない学生スタッフで対応できるケースには限りがある。そこで、面談結果を踏まえ、総合学習支援センターが提供するもう一つのサービス「オアシスプログラム」に繋いでいく。コロナ禍中でもオンラインでサービスを提供していたが、コロナ禍後（特に今年度から）、ピアサポの対面利用希望者が増えている。

(3) オアシスプログラム

学生相談室を持つ大学は多い。本学でも学生課の管轄下に保健センターと並んで学生相談室が、学生の心理的不調に対応している。これに加え本学では、アドバイザー教員支援を目的とする「学生の伴行者」サービス（これをオアシスプログラムと呼ぶ）を提供している。

本学では学生全員にアドバイザー教員がついている。上級年次ではゼミの教員がアドバイザーになるが、ゼミ配属が決まるまでの1、2年生には（学部ごとにばらつきはあるが）6〜15人に一人、教員がアドバイザーとしてつくことになっている。アドバイザーには、担当学生たちの出席状況についてLMSから適宜通知があり、必要に応じて個別指導を行う。さらに成績不振の学生は学

期はじめに面談を行い、改善に向けた対策などを学生と協議する。しかし、こうしたアドバイザーからの支援・指導によって出席状況が改善し、あるいは学業成績が回復する学生ばかりではない。学習習慣が身につけていない学生や精神的な課題を抱える学生は、単発的な教員からの激励指導だけで状況を変えることは難しい。

そこで、臨床心理士資格など対人支援に関する資格を持つ専門スタッフが、アドバイザー教員と連携して当該学生への学期単位での継続的支援を行うのがこのプログラムである。アドバイザー教員は当該学生をオアシスプログラムに誘導し、オアシススタッフが面談の上、支援方法を決める。アドバイザーは支援に関して適宜、スタッフから報告を受け学生の学習状況を把握する。同時に、教員側からも学生の変化や支援に関する注文などをスタッフに伝える。

このプログラムは卒業に向けた学習支援を目的としており、学生相談室が行う心理的支援とは異なるサービスである。わざわざ学生相談室に足を運ぶことに比べて、SPACE内で面談指導を行うことで他の学習支援サービスと紛れるため、利用に際しての心理的負担は軽減され

ていると考える。このサービスはアドバイザー教員と学生本人、両者の合意の上で開始されるものであるが、コロナ禍後の利用者は増加傾向にある。

まとめ

コロナ禍がおさまり、SPACEの利用者数は順調に回復してきているが、同時に学生のニーズも多様化し、大人数の学習セミナーは成立しにくくなっている。一方で、学生目線でニーズを探り対象を絞った小規模な学習支援イベントが増加傾向にある。

もともと自学自習の環境として整備されたSPACEである。個別のニーズに対応しつつ、自らの意思で学びを進める学生の成長を促し、励ます仕掛けや工夫が今まで以上に求められている。本稿で紹介した取り組みは、学生の自主性に働きかけつつ、今一步自律した学習者になりきれない学生に寄り添う仕組みをcommonsに埋め込む、本学なりの工夫である。

最後に筆者は、SPACEは創価大学の心臓であってほしいと願っている。心臓は体を巡って疲れた血液を受

け入れ、肺の空気を取り入れて活性化した血液を再び体中に送り出すポンプである。勉強に疲れた学生がSPACEで憩い、仲間と共に課題に取り組み、自分のペースで受講の準備をし、元気に次の授業に出かけていくあり様は心臓を連想させる。開設して10年余り、本学の心臓は今日もしっかり働いている。

〈注〉

※1 SPACE開設の背景やSACCのOLについては学士課程教育機構ニュースレターSEED 26号の記事をもとにしている。

※2 CETL(教育学習支援センター)は2000年に開設された本学のFD推進を担う組織である。開設当初からFD推進だけでなく、教員と共に授業をつくる相方である学生の学習力向上にも取り組んできた。特に、2009年度の学生支援GPに採択されて以来、オアシスプログラムも含め、学生向けの学習力向上講座を複数開発・実施してきた。この取り組みを踏まえ、2013年に教員向けサービスを行うCETLと、学生向けに学習支援サービスを行う総合学習支援センターとに機能分割した。

利用形態の変化に対応

池上真人

松山大学副学長

松山大学（学生数約5650名）のラーニングcommonsは「Academic Social Commons（以下、ASC）」との名称で、学生のアクティブラーニングを推進する場として、2016年に新キャンパスの開設と同時に新校舎1階にオープンした。広さ約400㎡の空間に座席約120席、数名で利用できる丸テーブル約10台、1人用の可動机約40台をグループ学習用に3〜6台ずつ組み合わせて10箇所配置している。ASCは会話をすることを前提としたスペースであり、新校舎の2階以上にはゼミ用の教室が多数配置されているため、ゼミの前後でのグループ活動やプレゼンテーションの練習などに利用されることを想定し、ASC内で利用可能な備品（プロジェクター、スクリーン、延長ケーブルなど）の貸出も

行っている。利用可能な時間帯は平日8時から22時までである（備品貸出は17時まで）〔写真1〕。

ASCの開設当初は、学内で初めての会話ができる学習スペースであったことから、多くの学生が複数名で利用していたが、2024年度開始時のアンケート調査（N=360）によると、ASCを利用したことのある学生の67%は「だいたい1名で利用する」と回答しており、現在は個人での利用が目立っている。これは、コロナ禍を経て、オンラインでのミーティングが簡単にできるようになったことから、プロジェクターなどを必要



〔写真1〕利用者の様子（個人、グループ）

とする場合以外での複数名での利用が減少したためではないかと考えている。ただ、先の調査ではそもそもASCを利用したことがあると回答した学生が全体の30%程度に留まっており、さらに利用したことがないと回答した70%の学生の半数は、その理由として「利用の仕方がわからない」「施設を知らない」と答えていた。ASCが単なる自習室や談話室ではなくラーニングコモンズであることも含め、認知度が低いことが一人利用の増加の要因であるかもしれない。そのため、認知度を向上させることで、グループ学習での活用を増やすことができるのではないかと考えている。

現在は、学生の利用形態の変化に対応するために、可動式の机や椅子、棚などのレイアウトを学生の利用に即した形に変更し、グループ学習用とは別に一人座席を複数設けているが、グループ学習の利用が増加すれば、再度レイアウトを変更して対応することを予定している。可動式は非常に利点が多いが、欠点としては、可動式であるがゆえに各机にコンセントなどを設置できないことが挙げられる。一人利用の学生からは各机にPCなどを使うためのコンセントを要望する声があるが、実現はできていない。

現在、ASCは学生の自主学习利用だけではなく、イ

ベントなどにも活用している。什器類が可動式であることを最大限に生かすことで、イベント用の広いスペースを生み出すことが可能であり、中央付近に備え付けられた98インチ4Kモニターも活用して、例えば学生の成果発表報告会などに活用している。さらに、ASCの一部にスペースを作ることで、季節によっては部活動の展示などにも利用しており、多くの人が集う多目的スペースとしての活用も増加している「写真2」。



[写真2] イベントや部活動の展示の様子

コロナ禍・キャンパス移転を経た「コラトリエ」の進化

嶋田みのり

東北学院大学ラーニング・コモンズ特任助教

はじめに

東北学院大学のラーニング・コモンズ「コラトリエ」は、2016年9月に土樋キャンパス、2023年4月に五橋キャンパスに開設され、主に学生の授業外学習や課外活動の場として活用されている。筆者は2016年4月に本学に着任し、ラーニング・コモンズ所属の教員として、両キャンパスの「コラトリエ」の開設準備や運営に携わっている。本稿では、そうした立場から、「コラトリエ」の運用や学びの支援について報告する。

1 「コラトリエ」の概要と利用状況

「コラトリエ」は、協同 (Collaborate)・交流 (Communication)・共有 (Commons) の三つの言葉の頭文字 (Co) と、学び (Learning) とアトリエ (Atelier) を組み合わせた言葉で、学生が集い、互いに教え、学び合うアクティブ・ラーニングを実現する場として設置されている。

土樋キャンパスの「コラトリエ」は、ホーイ記念館1・2階に設置され、延床面積1259㎡の広さを有している。グループ学習ができるさまざまなタイプの学習スペースがあり、学生の授業外学習の場として日々活用されている。また、一部のエリアは、地域住民などの学外者も利用でき、各学部や研究所が主催する公開講座や学生の課外活動団体などによる各種イベントが行われている。最近では、国際交流課や宗教センターなどが主催する国際交流イベントも活発に行われ、多様な学生との交流の場として機能している。

2023年4月、本学は仙台郊外の泉キャンパスと多賀城キャンパスを集約移転させ、新たに五橋キャンパス

を開学した。この移転により、全学生約1万1000人が仙台市都心部の土樋・五橋の両キャンパスに集うことになり、これまで利用が難しかった文系学部のみ・2年生や教養学部・工学部の学生も土樋キャンパスの「コラトリエ」を利用できる状況になった。その結果、2023年度の土樋キャンパス「コラトリエ」の利用者数は、前年度比1.65倍の、のべ6万5448人となり、過去最高を記録した「写真1」。

新たに開学した五橋キャンパスには、図書館とラーニング・コモンズが一体化した学習空間「コラトリエ・ライブラリー」が開設された。16階建てのシュネーダー記念館の2・3階と4階の南側がラーニング・コモンズ、4階の北側と5階が図書館になっており、



【写真1】土樋キャンパス「コラトリエ」

延床面積2670.5㎡の学習空間を学修支援課と情報課が連携して運営している。ラーニング・コモンズのエリアには、土樋キャンパスの「コラトリエ」と同様にグループ学習や成果発表会などができる大きささまざまなタイプの学習スペースを設けている。また、図書館と接続している特徴を生かし、個別ブース型の席を多数配置した自習エリアを設け、一人で静かに集中できる学習スペースも設けている。2023年度の「コラトリエ・ライブラリー」ののべ利用者数は、9万4562人で、土樋キャンパスの「コラトリエ」の利用を合わせると、16万人を超え、日々多くの学生が利用している「写真2」。



【写真2】五橋キャンパス「コラトリエ・ライブラリー」

2 「コラトリエ」における学習支援

「コラトリエ」では、学生の自立的な学びや協同的な学びを促すことを目的に、コラトリエセミナー、各種イベント、個別相談を実施している。コラトリエセミナーでは、「コラトリエ」の使い方を学ぶガイダンスや、アカデミックスキルに関する少人数セミナーを正課の授業と連携して実施している。その他、学生の協同的な学びを促すイベントを不定期に実施している。企画内容は毎年さまざまであるが、2023年度は、哲学カフェやホワイトボードミーティングの認定講師を招いたファシリテーション入門講座などを企画・実施した。また、先輩学生であるアカデミックサポーターが企画・主催する新入生向けの相談会も行っている。

個別相談は、大学の学びに関する相談を広く受け付けているが、レポートやプレゼン資料、卒業論文、大学院進学のための研究計画書などライティングに関する相談が多い。ライティング支援は、他大学のライティングセンターと同様に、レポート自体を良くすることよりも、良い書き手を育てることを重視している。そのため、添削はせず、学生

自身が問題に気づき、自分で改善できるよう支援を行っている。その他、学生の自立的な学習を支援するため、目標設定や学習計画、時間管理に対する相談も受け付けている。本学では、eポートフォリオ (TG-Folio) の運用が2023年度から始まり、4年間の長期目標や半期ごとの短期目標を立て、成績発表時に振り返りを書くことで学生の主体的な学びを促す取り組みを行っている。そのため、eポートフォリオへの記入に対する支援も行っている。

セミナーや個別相談などの支援は、以前はラーニング・コモンズの特任教員2名が行っていたが、五橋キャンパスが開学した2023年度からは、教養教育センターの学びの支援担当教員も加わった。また、先輩学生であるアカデミックサポーターもピア・チューターとして活動し、学生同士による学び合いを実現している。

3 コロナ禍による利用状況の変化と課題

コロナ禍により、ラーニング・コモンズの運用や学びの支援にさまざまな変化が生じた。大きな変化の一つは、静かな学習空間やクローズな学習空間へのニーズが高

まったことである。例えば、オンデマンド授業の受講など一人で静かに学習する学生や、就職活動などでオンライン面接や試験を受ける学生の利用が増加した。そのため、五橋キャンパスの「コラトリエ・ライブラリー」では、学習相談用として設置したオンライン用個室ブースを一般利用者にも解放するなどして対応している。

一方で、「コラトリエ」は、単なる自習エリアではなく、学生同士の学び合いやアクティブ・ラーニングを促すことを目的として設置された施設である。学生の協同的な学びを促すためには、PBL型授業を含むアクティブ・ラーニング型授業の推進や、そうした授業と連携した支援も加速させていく必要がある。

学びの支援については、これまで実施していた支援をオンラインで実施したり、ラーニング・コモンズで作成したライティング教材などをホームページ上で公開したりするなど、コロナ禍で加速したDX化により、時間や距離の制約を超えた支援ができるようになった。また、eポートフォリオの導入により、学生の学習状況が可視化され、必要な支援を分析・実施することも可能な状況になってきている。こうしたツールを有効に活用し、学生

のニーズに合った支援を実施していくことが今後の課題である。

おわりに

2024年5月現在、土樋キャンパスおよび五橋キャンパスの「コラトリエ」は、例年以上ににぎわいを見せている。本学は、東北最大規模の私立総合大学であり、多様な学問分野を学ぶ学生が集っている。学生同士の交流や学びを促す拠点として、「コラトリエ」の果たす役割は大きい。学生が集い、互いに教え、学び合うアクティブ・ラーニングを実現する場という設置理念を実現するために、今後より一層、学生同士の学び合いや協同的な学びを促す取り組みを行っていく必要がある。

キャンパス全体で構成する

ラーニングコモンズ

―追手門学院大学の教育改革がもたらした
ラーニングコモンズの新しい形―

伊藤 文男

追手門学院大学共通教育機構教授・
教務部長・学習支援センター長・
WILL推進センターコーディネーター

はじめに

二〇〇八年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」は、「何を教えるか」より「何をできるようになるか」を重視する方針転換を示した。この答申により、ディプロマポリシー・カリキュラムポリシー・アドミッションポリシーの明確化と質保証という大学教育改革が始まった。

ラーニングコモンズは、この大学教育改革の文脈の中

で、また情報社会の進展の文脈の中で、学生の学習支援を意図して登場した。ラーニングコモンズを構成する要素にはいくつかの見解があるが、情報通信環境の整った空間、資料などのコンテンツ、人的サポートという一般的な三つの要素を充足するという要請から、大学図書館などに設けられた特別な空間というニュアンスがある。

本稿では、教育理念を拠りどころに改革を推進してきた追手門学院大学（以下、「追大」という）が、どのような教育を目指し、ラーニングコモンズの機能を取り込んだ新キャンパスを開設したのか、さらに開設後どのような施策を展開してきたのかをまとめてみたい。

1 「郷中教育」を基礎に据えた教育

追手門学院は、一八八八年に、大阪城の大手前に創設された大阪偕行社附属小学校に端を発する。その後中学校、高等学校と順に教育機関として発展し、一九六六年ついに念願の大学設立に至った。現在は、こども園から大学院までの総合学園に発展している。

なお、大阪偕行社附属小学校創設にあたり、創設者で

ある薩摩藩出身の高島鞆之助中将（後の陸軍大臣）は「郷中教育」、すなわち年長者が年少者を教える薩摩藩独自の教育を基礎に据えた。

2 教育理念が改革の拠りどころ

追大は連続した改革を展開しているが、特に近年注目すべきは、創立一三〇周年を迎えた二〇一八年に発表した四つの追手門学院教育改革宣言と、既存の茨木安威キャンパスに加え翌二〇一九年に開設した茨木総持寺キャンパス（以下、「新キャンパス」）であろう。なお、四つの追手門学院教育改革宣言とは、①WIL (Work-Is-Learning) の実現、②成長の可視化、③ICT活用、未
来社会対応、④教育の質保証である。

追手門学院一三〇年志『改革の10年』に記されているように、これらの改革の拠りどころは、「独立自彊じききょう・社会有為」という教育理念である。さらに教育の原点「郷中教育」を踏まえた「学びあい、教えあい」の教育も、教育改革に通底している。

また、WIL (Work-Is-Learning) とは本学院の造

語で、「行動して学び、学びながら行動する」という追大独自の教育スタイルを示している。行動 (Work) を通じて学修 (Learning) を行い、それを即実践に反映する経験を蓄積することで、予測困難な状況の中でも行動し、学び続ける力を養うというものだ。二〇二三年度は、五七の正課科目 (三八七クラス) と七つの正課外活動がWILとして登録・認定されている。

新キャンパスに建設された新校舎アカデミックアークは、まさに、教育理念、「学びあい、教えあい」、そしてこの教育スタイルWILが設計コンセプトとして反映された空間となった「写真1」。



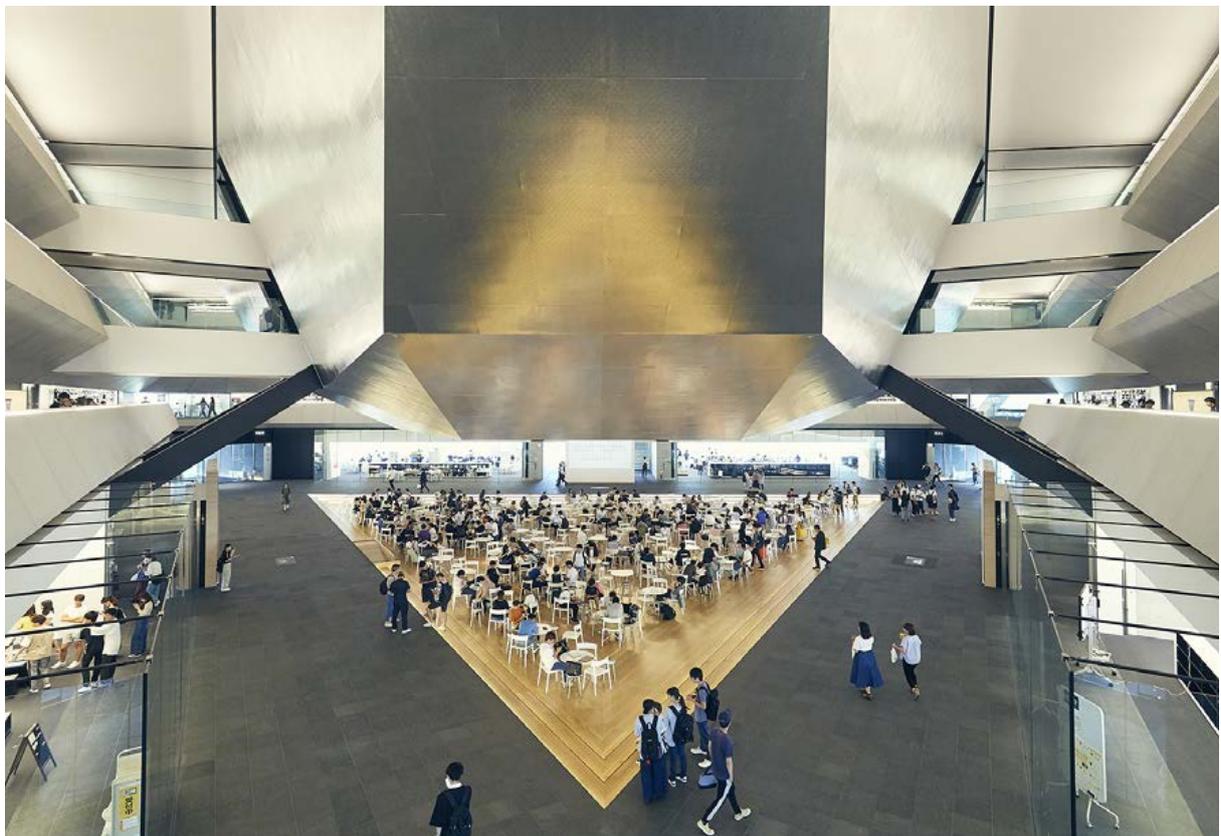
[写真1] 逆三角錐のアカデミックアーク

3 アカデミックアーク全てが
ラーニングcommonsとしての空間

アカデミックアークには、ラーニングcommonsという名称の空間は存在しない。それは、いわばアカデミックアーク全てがラーニングcommonsとして機能できるように設計されているからである。

逆三角錐のアカデミックアークは地上五階建て、最上部の一边は一三〇m、甲子園球場一個分の規模である。一階から五階まで、各フロアとも、外側には教室が配置されている。壁一面のホワイトボードや自立式のホワイトボード、可動式の机と椅子は、教室での「学びあい、教えあい」を、そしてグループワークやプレゼンテーションなどの、アクティブな学びを実現するための設備の整った空間となっている。

建物の中心部一階には学生が語らい、憩い、学び、さらにイベント開催可能なリースペースWILホールが、三階・四階には空中に「浮いている」アラムナイライブラリーと称する知の拠点の図書館が配置されている。「賑やかに学ぶ」「議論して学ぶ」をコンセプトとしたグルー



[写真2] WIL ホールと空中に「浮いている」アラムナイライブラリー

プ学習室もあり、「学びあい、教えあい」を促進する空間は、もちろん図書館にも整備されている「写真2」。

また、全学生にノートパソコンを必携としたBYOD (Bring Your Own Device) と、それを実現するために情報通信環境 (LMS・校舎内無線LAN・コンテンツ) が整備・充実している。学生は、校舎内のどこでもWi-Fiにつながった自身のノートパソコンを使うことができる。授業中の教室はもちろん、WiLホールでも、後述のディスカバリープロムナードでも、食堂でも、日常的にノートパソコンを活用している学生の姿を見ることができ。学生は意識せず、アカデミックアーク全てをラーニング commons の空間として活用している。

4 電子書籍化によって多様化が進むコンテンツ

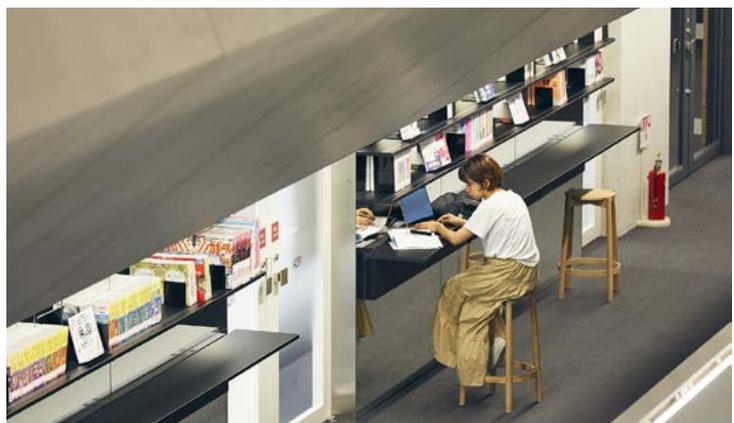
ラーニング commons には、調べたいことがあった時にすぐにアクセスできる文献・論文・ジャーナルなどの資料となるコンテンツの存在が求められる。

図書館以外にも、建物の二階から四階までの廊下壁面には、図書で埋め尽くされた回廊ディスカバリープロム

ナードが配置されている。その場で読むことはもちろん、自動貸し出しシステムを使えば学内滞在中、貸出場所や貸出時間の制約を受けない「写真3」。

また、現在力を入れているのが、電子図書館の推進である。追大では、電子図書館サービス Librarian をいち早く導入してきた。このサービスで、既存の電子図書はどこからでも貸出を受けることができるという点で、自由度を高めている。

さらに、Romancer の活用は、学生の書いた論文などを学生自ら電子書籍化し電子図書館にアップロードすること、すなわち「知の還流構造」を促進することを可能にした。また、教員自身が作成した教材や授業で学生が制作した成果物の電子書籍化は、コンテンツの保存、貸



[写真3] 図書で埋め尽くされた回廊ディスカバリープロムナード

出・返却という運用における制約の低減に寄与し、多様なコンテンツの活用を促進している。

なお、電子書籍の自動音声読み上げによるバリアフリー化などのアクセシビリティを高める効果は、視覚障害を持つ当事者のみならず、ユニバーサルデザインが進む社会に対する、学生への意識づけにも寄与している。

5 組織再編を機に転換が進む人的サポートの形

追大では、二〇二二年度に教育改革を進める一環として、センターの組織再編を行った。

学生にとって常に最適なカリキュラムや学習環境の提供を行い、供給者本位の教育から、学修者本位の教育への転換を推進する組織として、MATC H推進センターを新たに発足した。併せて、「教員の能力開発」に取り組み、全学の教育力向上を図るためファカルティ・ディベロップメントを推進する組織として、教育支援センターを再編した。

学生に対する支援を行う組織としては、学習支援センターとW I L推進センターが再編された。学生に対する

人的サポートという点で見ると、この両センターでは、「学びあい、教えあい」を促進する取り組みを行っている「写真4」。

学習支援センターは、入学予定者の入学前教育グループ、リメディアル教育を支援するリメディアル教育グループ、ライティング能力向上に係る学習支援を行うライティングヘルプデスク、主に公立学校教員採用試験の合格を支援する教職支援室から構成され、いずれも正課外活動における支援を行っている。入学前教育グループとライティングヘルプデスクは、コーディネーター教員の支援を受けつつ、学生が自律的に組織を編成し、メンバー募集計画の策定、知識や技能を向上させる研修の企画・実施、支援プログラムの遂行などを、主体的に展開している。また、教職支援室では、四年生が後



[写真4] 学生が実施するライティングヘルプデスクの研修

輩のために試験問題の作成、模擬面接の実施指導、個人及びグループ相談などを行っている。いずれも、「学びあい、教えあい」が文化としても定着しつつある。

同様に、WIL推進センターで推進しているガンバ大阪プロジェクト実践（正課科目）では、同センター所属のコーディネーター教員の支援を受けつつ、大阪府吹田市のパナソニックスタジアム吹田で行われるガンバ大阪の試合当日の会場運営の支援を目的に、学生が自律的な組織を編成し、主体的に学生募集、事前・事後研修、当日の運営を行っている。

ラーニングコモンズにおける人的なサポートという観点からは、一般的には、専属教員によるリメディアル教育支援、図書館職員と大学院生による組織的な学習支援・ライティング支援、学生同士のピアサポートなどが挙げられよう。追大では、多少の安定性を欠いていても、人的サポートの主体は、教職員による支援から学生同士の「学びあい、教えあい」へと転換してきた。「何をできるようになるか」を重視する学修者本位の教育を展開する場合、学生が主役となる「学びあい、教えあい」は、確かな成長を促進する学習形態である。

現在、両センター所属の教員は、学生による自律的な組織編成と主体的な運営に関する知見を共有し、全学的に敷衍^{ふえん}していく可能性を模索している。

6—二〇二五年度新校舎でさらに進化

現在建設中の茨木総持寺キャンパス二期棟アカデミックベース（六階建）が、二〇二五年四月から本格稼働する。この校舎は、執務スペースとなる六階を除き、全てのフロアの教室・研究室・オープンなイノベーションラボが千鳥配置になっている。教員と学生、学生同士の日常的な交流を、さらに促進しようという思いが込められている。正課科目・正課外活動を問わず、開館中はいつでも、どこでも、誰とでも、自由度の高いコンテンツを活用しながら、多様な学習を可能にする空間に進化していく。

追大では、教育理念、「学びあい、教えあい」、そして教育スタイルWILを反映した設計コンセプトに基づき、新キャンパスが開設された。ラーニングコモンズは特別な空間ではなく、キャンパス全体で構成する当たり前の存在となっているのである。

学生が集まる空間を魅力的に — 明治大学におけるラーニングコモンズ —

菅和禎

明治大学管財部施設課課長補佐

はじめに

明治大学は、建学の精神である「権利自由」「独立自治」の考えに基づき、近代社会へ変容する社会であった明治時代の1881年に明治法律学校として創立された。現在、その精神は「個」を強くする大学という理念へと継承され、都市型総合大学として駿河台・和泉・生田・中野の4つのキャンパスで、約3万2000人の学生が学ぶ。

1934年に開設された、文系6学部の1・2年生を中心に、約1万1000人の学生が通う和泉キャンパスは、2000年代頃から建物の老朽化に加え、時代のニーズに合った学修環境不足という課題を抱えていた。

この課題解決のため、和泉キャンパスでは、創立130周年記念事業として2012年5月に図書館（日本建設業連合会BCS賞、日本図書館協会建築賞など受賞）を、140周年記念事業として2022年4月にラーニングスクエアを開設した。

これにより、従来の機能に加え、アクティブラーニングを可能とする学修や交流の場、そして、居心地良く楽しく学修することができるラーニングコモンズ機能をもつ多種多様な場をつくり出すことに成功した。

1 和泉図書館

(1) 入館者数2倍に

旧図書館では、1日の平均入館者数が3500人程度と学生の「図書館離れ」が進んでいた。

そこで、「人と人・人と情報を結ぶ『架け橋（LIA） ISON・リエゾン』』『知の拠点』とすること」を基本コンセプトに掲げ、図書館の基本機能である「資料保管・提供」に、ラーニングコモンズの機能である「プレゼンテーション」「コラボレーション」「リラクゼーション」

「教育支援サポート」の4要素を付け加え、新しい図書館の建設構想が策定された。

このような図書館をつくり、実現していくために、誰もが入りやすく親しみやすい、長時間快適に過ごせる環境をつくる必要不可欠であった。

そのため、ソフト面の運用からハード面の空間のつくり方まで、従来の図書館の型にはまらない、新しい工夫や仕掛けを取り入れた。

その結果、多くの学生が図書館を利用し、竣工年の1日の平均入館者数は旧図書館の2倍以上の8000人程となった。

(2)空間構成

新図書館は、4階建てのガラス張りの建物で、ラーニングコモンズ空間を取り入れた下層階から閲覧席を中心とした上層階へ、機能配置に応じた「動」から「静」への音のゾーニングをつくっている。

1・2階は、会話をしながら学修ができるグループワークの場を中心とした「動」の空間、3・4階は、個人ブース型の閲覧席を中心に「静」の空間として「個人の学習・研究の場」を充実させ、従来の図書館機能を向上させた。

まず、ラーニングコモンズの役割を果たす1・2階については、学生が図書館に引き込まれる、気軽に入りやすい工夫を重ねた。

1階のエントランスには、カフェ、ホール、ギャラリーなど従来の図書館機能にない交流の場を設置した。

2階には、コミュニケーションラウンジ、グループ閲覧室、共同閲覧室を配置し、「活動・交流の場」とした。コミュニケーションラウンジには、カラフルな配色でカジュアルにデザインされたソファなどを用い、親しみやすさと楽しさをもたせている。

グループ閲覧室は、利用人数や目的によって使い分けることができるように、収容人数、机・椅子のデザインを変えて6室を設置した。

共同閲覧室は、可動式の机や椅子、ホワイトボードを設置し、フレキシブルに領域をつくることができ、ブレインストーミングなどグループワークに適している。

1階の「交流の場」から2階の「活動・交流の場」を、エントランスの吹抜けを通じてガラス越しに縦につなが、にぎわいのある「動」の空間に一体感をもたせ、活気ある図書館内の活動を建物内外に展開した。

3・4階の閲覧席は、さまざまなタイプの個人ブース席とタスクアンビエント照明（室内全体の照度を少し落とし、必要な机上だけを明るくする）によって、落ち着いて集中できる空間とした。

にぎわいやコミュニケーション機能を担う1・2階の「動」の空間、図書館機能を担う3・4階の「静」の空間を両立させるにあたり、建物の1階と4階へ、建物入口から奥へと進むにつれて、「動」から「静」の空間となるよう機能配置に応じた「音のゾーニング」をつくった。

これにより、利用者自身がその時々によつて心地良い音環境を選択し長い時間居心地良く利用できる施設となった。

(3) 利用状況

竣工後、利用状況の視察と学生へのヒアリングにより、以下のことが明らかになった。

- ①カラフルでカジュアルなソファなどの家具は、学生の学修意欲が高まり人気の場所となる。
- ②ガラス張りで勉強や談笑している姿が屋内外から見られ、「見る」「見られる」の関係性から生まれる相乗効果によつて学修に対する意欲をお互いに刺激する。
- ③「うるさすぎず静かすぎず」の空間は、お互いの雑音が

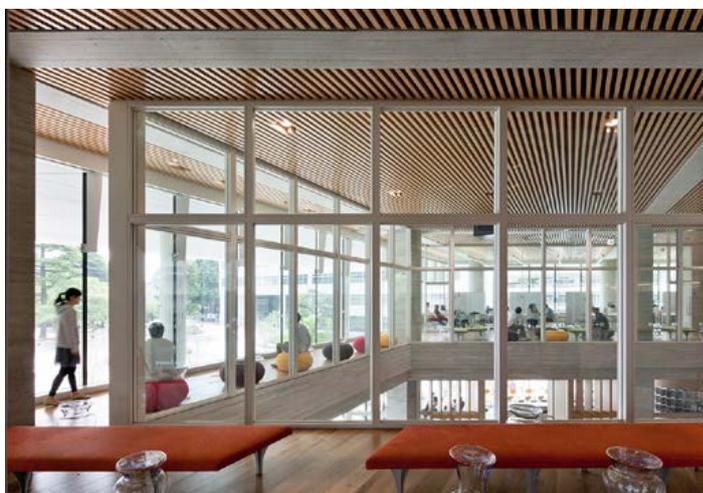
気にならず、モチベーションが持続できる適度な音環境で、多くの学生が居心地良く感じ、常に楽しく談笑しながらグループワークをしている。

- ④グループ閲覧室は、10人以上の部屋を主に設置したが、4人前後で使用されることが多い。

- ⑤「活動・交流の場」では、利用率が高くなるほど禁止されている飲食物を持ち込む姿を多く見かける。

- ⑥多種多様な場合は、自分のお気に入りの場所を見つけ、居心地良く長い時間学修することができ

きる。これらが、次に建設される和泉ラーニングスクエアの計画に活かされていくこととなった。



[写真1] 図書館2階コミュニケーションラウンジ

2 和泉ラーニングスクエア

(1) 新教育棟構想

図書館開館から6年後の2018年、和泉新教育棟建設の基本構想が策定された。

和泉キャンパスは1・2年生を中心としたキャンパスであることから、総合的な知の基盤である「教養教育」「初年次教育」に加え、自学自習を推進し、「個」を育成する学修環境をつくることを目標とした。大・小教室の単なる教室だけでなく、友人たちと一緒に学び、さまざまな出会いや交流が生まれる主体的・対話的な学びの新しい学修スタイルが実践できるラーニングコモンズが必要である。

そこで、キャンパス全体のラーニングコモンズを「出会う」「集う・つながる」「協働」「熟考・集中」「発表・発信」の5つの学修の在り方に分類し、和泉キャンパスに不足している要素を抽出した。その結果、「出会う」「発表・発信」の場が不足していることが明らかになった。そこで新教育棟に、これらの要件をそろえる場を設置し、キャンパス全体の機能連携と学びの場の多様性を創出す

ることを目指した。

また図書館と同様に、「学生たちが集まる場所をつくり、その空間を演出し魅力的なものにする」ことを実現するために、学生たちを惹きつける工夫や仕掛けを取り入れた。

具体的には、①親しみやすい空間、②学生が自然と集まる空間、③多種多様な空間がキーワードとなった。

(2) 空間構成

① 親しみやすい空間

建物内は回遊性のある動線をつくり、その中にグループボックス（少人数でグループワークができるスペース）、ボックスベンチ（ボックスで囲まれた横長ベンチ）、畳の小上がりなどの家具を配置し、場面が次々に展開していく単調とまらない設えとした。それは、廊下や階段を歩くだけで楽しく、新しい学修や人との偶発的な出会いを生む一つの街のような空間となっている。

サインでは、動きをつけたピクトグラム、折り曲げた階数表示、パラパラマンガ風に描いたトイレの誘導、錯視を使ったフロア案内など、立体的に動きをつけユニークさと楽しさを演出した。

インテリアは、床や壁をグレー調のモノトーンとし、そこに自然の木を感じさせる木質材で覆われたボックスやカラフルな壁をもつガラス張りのグループボックスやソファを設けてスタイリッシュな空間とした。

② 学生が自然と集まる空間

学生が楽しい気分でありラックスしながら学修できるように、ゆったりとしたローソファやテーブルなどの家具を入れた。このほか、横長ベンチ・ファミレスベンチや畳の小上がりには四隅に柱を立てたりボックスにすることで、共用部との緩やかな境界をつくり、利用者が落ち着く「自分たちだけの空間」と感じられるようにしている。

2・3階のカラフルなガラス張りのグループボックスは、学生の活気ある活動をする姿が主役となって表出するように、エントランスの吹抜けに飛び出してつくられている。ガラス越しに見えるその様子は、おもちゃ箱の中で楽しんでいるようで特別感があり、学生の興味をそそる。図書館と同様に、「見る」「見られる」の関係性から生まれる相乗効果によって、お互いの学修意欲を刺激する仕掛けとした。

1階～3階、4階～7階にある吹抜け空間を一つの広

場として捉え、吹抜け周りのカウンター席などに充電用の電源を設置し、学生を自然とそこに呼び込み、学生が常時いる、にぎわいのある空間とした。

1階にはカフェコーナーのほかに、床を数段掘り下げた学生たちが自然と集まる仕掛けを施した。ここには、ゼミ利用やグループワークもできるプレゼン設備が設置されており、自然と学生が集まってきてにぎわいを生み出す。

③ 多種多様な空間

飲食可能なスペース、みんなで集まれる交流スペース、グループから個人単位での学修スペース、また各階に設けた半屋外のテラスなど多種多様な場を設置する。

また、このように多種多様な空間は、さまざまな学修スタイルに対応することができる。それは、従来のホワイトボード主体で議論する学修スタイルから、コ罗纳禍によって変化した学生一人ひとりがPCを持ち歩く、PCを中心とした学修スタイルまで幅広いものである。

そのほか、建物の両側と吹抜け上部に設けた高窓から常時ふりそそぐ自然光が、開放感のある明るい居心地の良い空間をつくった。

(3) 利用状況

学生たちが、いつの間にか自分のお気に入りの場所を見つけ、居心地良く長い時間学修することができるようになったことは学生の学修成果にもつながっている。

2面または3面が壁やガラスで囲まれているテラス空間は、ボックス・ベンチ・カウンター席を設置して、緑など自然を感じ、景色が眺められ、開放的でありながら適度に落ち着いていられる快適な空間である。

リフレッシュやランチをする学生もいれば、友人との談笑や外部で勉強をしている学生もいて、自由に使われる空間となっている。

おわりに

和泉キャンパスに「多くの友人や多様な学びなど、さまざまな出会いがあつてとても楽しかった、と学生たちの記憶に残る建物をつくる」という思いで施設整備計画を進めた。

現在、図書館とラーニングスクエアに広がる多様なラーニングコモンズで、毎日多くの学生が自分のお気に入りの

の場所を見つけて学修している。

今後も、教育の場は更なる展開が予想される。どのような展開においても、大学という学びの場には人と人とのコミュニケーションが希薄にならない交流できる空間、リエゾン機能をもったラーニングコモンズ空間の需要が拡大するであろう。

これからも、人との交流が生まれる空間づくりに努めていきたいと考える。

学生たちが卒業してからも、明治大学のキャンパスで過ごした思い出の原風景を支えに、社会で活躍してもらえたらうれしいかぎりである。



[写真2]ラーニングスクエアのエントランス